

* 登場人物

本宮 泰	(21)	北見の大学生
黒川 真吾	(22)	本宮の同級生
本宮 朝子	(44)	本宮の母親
黒川 尚美	(19)	黒川の妹
佐久間英機	(40)	大学助教授

「私の声が聞こえますか？」

天原 隆也

「キーツ」と、ダンプカーの急ブレーキ。

「キヤー」と女性の悲鳴。

救急車のサイレンが遠くから聞こえてくる。

列車の音が重なってくる。

並んで自転車を漕いでいる。

黒川「今朝、茜の夢を見た」

本宮「そうすか」

黒川「最近ずっとだ。俺に、何か言おうとしてるんだよ」

本宮「先輩、あまり考え詰めないで下さい」

黒川の自転車が止まる。

本宮「(も、止まり) どうしたんです？」

黒川「俺、行くところがあるんだ」

本宮「またですか。たまに授業に出てくたさいよ。佐久間先生心配してましたから」

黒川「(だるげに) ああ、そのうち行く」

本宮のM「黒川先輩と僕は、北見市内にある

大学の同じ工学部で学んでいる。今年2月、

先輩の恋人の茜さんが置戸で交通事故で

死んでから、先輩は以前のように馬鹿話を

することもなくなり、友達も黒川先輩から

離れていった」

研究室。授業のチャイムが鳴っている。

男子学生1「おい、黒川先輩やめちまうのか？ このまま」

男子学生2「だらしねえなあ先輩も。女で駄目になるなんてさ」

男子学生3「先輩が、ふるさと銀河線の線路の上を歩いているのを見たんだってよ」

男子学生2「嘘だろ」

男子学生3「まじまじ、一人だけじゃないもの、見たの」

男子学生1「そういえば、先輩の彼女、ふるさと銀河線で通学してなかったか？

なあ、おい、本宮」

本宮「ああ、茜さんは置戸から通ってた」

男子学生1「死ぬ気か？先輩」

男子学生3「ばあか、廃線で死ぬるかよ」

学生達の爆笑。

本宮のM「北海道ちほく高原鉄道ふるさと銀

河線は、2006年4月20日、北見発2

3時2分の列車をもって廃止となっていた」

街中の雑踏。本宮、歩いている。

携帯着信音。

本宮「あ、母さん、何？」

朝子「ねえ泰、父さんから電話があつてさ」

本宮「え？……」

朝子「家に帰って来たいらしいんだよ」

本宮「何だよ、今さら。相手の女とはどうなつたの？」

朝子「別れたとか言ってたけど」

本宮「どうせ捨てられたんだろ？」

朝子「……だと思っ」

本宮「ほっといたらいいよ」

朝子「けど……」

本宮「忘れたの？母さんと僕のこと、猫の子を捨てるように捨てて出て行った男なんだよ」

朝子「そうだよ」

本宮「今からバイトだから、切るよ」

携帯を切る。

本宮のM「高校2年のとき、親父は若い女と仲良くなつて家を出て行った。家の中はめちゃめちゃになり、母さんは神経をすり減らして、しばらく口を聞かなくなっていた。そんなこととしておいて、今さら家に戻ろうなんて、許せるもんか」

「ピツ、ピツ」とバーコードを読む。

本宮「2点で、346円になります。はい、丁度いただきます。ありがとうございます。またいらっしやいませ」

尚美「こんにちは」

本宮「あ、尚美さん」

尚美「あ、尚美さん」

尚美「ちよつと時間とれます？」

尚美「（小声で）実は兄が」

本宮「今日も廃線跡を？」

尚美「はい、茜さんに逢うと言って」

本宮「まったく、なにやっつてんだ黒川先輩」

尚美「小さい頃に父が亡くなって、私はいつ

も兄の後ろをついて歩いてきたんです。あ

んな兄を見るのは初めて。本宮さん、兄を

助けて」

本宮「でも、僕には」

尚美「おねがい」

本宮のN「尚美さんは、高校を卒業して看護
学校に通っている」

踏切。警報音が鳴っている。

列車が通過する。

本宮「先輩、黒川先輩」

黒川「ああ、本宮」

本宮のM「驚いた。黒川先輩が踏切をじつと

覗き込んでいた。げっそり痩せて」

本宮「何してたんですか？ 心配してますよ、

みんな」

黒川「ああ」

本宮「何処に行ってたんです？」

黒川「ちよつとしたものを拾いにな」

本宮「それ、ラジカセじゃないか」

黒川「おう」

本宮「拾うって音っすか？」

黒川「意識の流れみたいなものだ」

本宮「意識の流れ？」

黒川「本宮、水は流れてないときは何してる

と思う？」

本宮「さあ」

黒川「湖の水面は鏡みたいで、そこに水があ

るかどうかも分からないよな。けど、水が

一度流れ出したら、姿を現して音を立てる。

瀧がそうだ」

本宮「それがどうしたんです？」

黒川「意識も同じだよ。意識は動くときとか

乱れるときが一番捕まえやすい」

本宮「それって、茜さんのことを言ってるん

ですか？ 先輩」

黒川「当たり前だろ」

本宮「冗談きついつすよ」

黒川「じゃあな」

本宮「ちよ、ちよつと待ってくださいよ」

黒川「悪いけど、用あんだよ」

黒川、急ぎ足で去る。

本宮のM「2週間ほどして、黒川先輩が研究

室に出てきた。休み時間に屋上に呼び出さ

れた」

本宮「どうしたんですか。ラジカセなんかセッ

トして」

黒川「いいものを聞かせてやる。いいか？

びっくりするなよ」

テープをセットし、スイッチを押す。

「風にそよぐ樹のざわめき、川のせせ

らぎ、遠くで鼻の鳴き声、何かに驚い

てバ サバサと飛び立つ鳥の羽音」

黒川「どうだ？」

本宮「何です？」

黒川「女の声が聞こえるだろ」

本宮「僕には聞こえませんが」

黒川「鳥が飛び立つ前だ。茜の声が入ってる

んだ。よく聞いてくれ」

スイッチを押す。

「風にそよぐ樹のざわめき、川のせせ

らぎ、遠くで鼻の鳴き声、何かに驚い

てバサバサと飛び立つ鳥の羽音」

（なるほど、聞きようによつては、鳥の

羽音の前に、女性のささやくような声

が一瞬間こえるような）

黒川「今度はどうだ？」

本宮「先輩、悪いけど僕には聞こえません。

何かの音が混じったんじゃないですか？」

黒川「いや、別の音は入ってない」

本宮「……先輩、『ツイゴイネルワイゼン』

て知ってます？」

黒川「いや知らん」

本宮「サラサーテが作曲したバイオリン曲なんです。曲の途中で人のささやく声やすすり泣く声が聞こえると言われたけど、それって演奏によるものなんです。音は、聞く人の意識によってどんなにでも聞こえるって言います」

黒川「もういい」

本宮「家に帰ってます？」

黒川「お前には関係ない」

本宮「尚美さんが心配してました」

黒川「妹と会ってるのか？」

本宮「い、いえ、この前偶然会って話しただけです」

黒川「ふうん、まあいい、じゃあな」

本宮「授業はどうするんです？ せっかく来たのにもう帰るんすか？」

本宮のM「黒川先輩は、諦めた訳ではなかった。先輩はテープを工学部の佐久間助教授の元に持ち込んだ」

機材を操作する音。

ディスクが、ウイーンと回って止まる。

佐久間「これは、ある工場の騒音の中で音を録音したものでな、波形と信号パワーを時系列表示したものだ。ここまでは分かるよな？」

黒川「はい」

佐久間「ところが、これだけでは人の声は分

からない。そこで、短時間スペクトルを連続測定して時間を横軸、周波数を縦軸、パワーレベルを濃度で表示すると、と」

機材を操作する音。

佐久間「ほら、ここを見みてみなさい。ここだ。この蛇の抜け殻みたいな縞模様がフォルマント、分かりやすく言うと声紋だ。だから、この工場で、人の話声が聞こえていくということになるわけだ。けど、君の持ってきたテープには」

黒川「先生、もう一度解析して下さい」

佐久間「黒川君、何度やっても同じだ。このテープには、人の声は入ってない」

黒川「……そうですか」

佐久間「君、最近授業に出てないけど、バイトでもしてるの？」

黒川「先生、人の意識って機械的に捉える方法はないんでしょうか」

佐久間「黒川君、工学部の学生がそんなこと言っちゃ駄目だろう。卒業出来なかったらどうするの？ 北見製作所だって、待っててくれないよ」

黒川「失礼します」

佐久間「待ちなさいって。何か悩みでもあるんじゃないの？」

ドアが閉まる。

本宮のM「肩を落として校門を出て行く黒川先輩を、研究室の仲間が冷たく見送った。先輩の姿を美しいと思うか愚かと捉えるかは、受け取る者の感性にゆだねられる。工学部で材料工学を専攻する僕にとつて、実体のないものを追う先輩の姿は、ぶざまで醜い」

校内。本宮、一人で材料実験している。携帯着信音。

本宮「何？ 母さん」

朝子「また父さんから電話がかかってきた」

本宮「今度は何て？」

朝子「私たちに手をつけて謝りたいって」

本宮「相手にすんなって」

朝子「父さん、体が悪いみたい」

本宮「どこが？」

朝子「肝臓だって」

本宮「嘘ついてんだよ」

朝子「本当だよ。顔色青いもの」

本宮「会ったの？」

朝子「え？」

本宮「会ったんだろ」

朝子「……仕方ないじゃないの。どうしてもって言うから」

本宮「もう、会うなよ」

朝子「けど、面倒見る人いないみたいだよ」

本宮「母さん、まだ未練あるの？」

朝子「冗談じゃないわよ。あんな人」

本宮「だったら、相手にすんなよ。実験やっ
てっから切るよ」

金属の切断を始める。

本宮のM「父と母を見てきたからよく分かる。
愛なんて、上げ底で見栄っ張りで、嘘つき
で。(と、力を入れるとガラんと落ちる)
その点、金属は嘘をつかない」

切断し終わり実験を続ける。

再び着信音が鳴る。

本宮「いい加減にしてよ！ アルミ溶けちゃ
うだろ」

尚美「ごめんなさい」

本宮「あ、え？」

尚美「黒川です。黒川尚美です」

公園。鳥のさえずり。

楽しいな子供達の声。

尚美「ごめんなさい。忙しいのに」

本宮「(緊張) い、いや、学生は暇と決まっ
てるんだよ」

尚美「兄が戻らないの」

本宮「どこにいるか分からないの？」

尚美「ええ、どこかのお寺にいたと言ったの
が最後で」

本宮「お寺？」

尚美「それで、本宮さんに何か連絡が入って
ないかと思って」

本宮「先輩、何か言ってた？」

尚美「座禅を組んでるんだって」

本宮「座禅を？」

尚美「それから、声は振動だから有限と無限
をむすぶとか、人の声は言霊に乗って現界
と彼岸を繋ぐとも言いました」

本宮「馬鹿だなあ、何やってんだ、先輩」

尚美「そうでしょうか」

本宮「え？」

尚美「(独り言のように) 本当に兄は馬鹿で
しょうか」

蝉の群唱。

僧侶の群唱。それが蝉のそれにジャワ

ジャワジャワとうねって溶け込む。

黒川が部屋のドアを遠慮なく叩く。

本宮のM「一月ほどして、大学の寮に黒川先
輩が訪ねてきた」

本宮「元気ですか？」

黒川「ああ、お前にもすっかり心配かけた
な」

本宮「安心しましたよ。授業出るんでしょ？」

黒川「いや」

本宮「先輩、卒論も進んでないし」

黒川「そんなことより、本宮、キャンプに行

かないか？ 今度の3連休
本宮「キャンプ？ って、どこへ」

黒川「いいから、早く答えろ」

本宮「今度の休みは予定が入ってます。悪い
すけど」

黒川「尚美も一緒に行くんだ」

本宮「尚美さんも？」

黒川「そうか、残念だ」

本宮「いや、やっぱり行きます。都合つけま
す」

黒川「(ほっと) そうか」

駅前の雑踏。バスの発着状況。

北見発のバスのアナウンスなど。

黒川「よう、お待たせ」

本宮のM「黒川先輩が、一人で、大きな荷物
を背負い込んで現れた」

黒川「今日も暑くなりそうだな」

本宮「……ええ」

黒川「どうした。何かあったのか？」

本宮「尚美さんは？」

黒川「ん？ 妹がどうかしたのか」

本宮「いえ、……何でもありません」

バスが走り去る。

カッコウが鳴いている。

遠くで川の流れる音。

本宮のM「僕たちは、常呂川の上流に沿った、ふるさと銀河線脇の寂しいバス停でバスを降りた。そこは、死んだ茜さんが住んでいた置戸という町のすぐ近くだった」

黒川「いい所だろ。おい荷物持ってきてくれ」

本宮「(担ぎながら) 何入ってるんすか？

これ」

黒川「ああ、テント、ガスボンベ、食料、ラ

ジカセ、いろいろだ」

本宮「ラジカセ？」

線路の上を、ザクザクザクと二人が歩く。どこかでカッコウが鳴いている。

本宮のM「廃線になったふるさと銀河線の軌道先を先輩と歩いた。先輩のテープ、ふるさと銀河線、茜さんが住んでいた置戸、それから、頭の中でぐるぐる回った」

本宮「先輩、どこまで歩くんすか？」

黒川「大丈夫だ、列車は来ない」

本宮「そんなことを聞いてるんじゃありません」

突然止まる。
荷物をドサツと置くのと近くの藪から大

きな鳥がバサバサバサと飛び立つ。

黒川「今夜はここにテントを張る」

本宮「どこにそんな場所があるんです？」

黒川「あるじゃないか、いくらでも」

本宮「まさか、線路にテントを張るんじゃない

いですよね」

黒川「いや、線路の上だ」

本宮「冗談きついすよ、先輩」

黒川「本宮よ、頼むから今日だけ俺の言うとおりにしてくれないか」

本宮「先輩、やっぱり帰りましょうよ」

黒川「本宮、頼む」

本宮のM「結局線路にテントを張った。日が暮れて辺りは真っ暗になり、音は不気味なほど遠くから届いた」

二人でラーメンを食う。

黒川「ああ、うまい」

何かに驚いた鳥がバサバサと飛び立つ。川のせせらぎ。

遠くで鼻の鳴き声。

本宮のM「何処かで聞いたと思った、いつか先輩が持ち込んだテープに入っていた音だった」

本宮「先輩、どうして僕を連れてきたんです？」

黒川「本宮、真面目に聞いて欲しい」

本宮「何です？」

黒川「人の意識というのは、いつも俺たちの周りを彷徨ってるんだ。それで、その意識はな、いつも俺たちに何かを訴えようとしている。ところが、人間はそれに気づいてくれない」

本宮「先輩、意識は思いの世界ですよ。誰にも意識なんて捉えられないです。生意気言うようだけど、先輩も工学部の学生だから、それくらい分かるでしょ」

黒川「事実なんだよ、本宮。説明しても信じて貰えないから、だから証人が要るんだ」

本宮「僕がその証人ですか？」

黒川「世の中で、俺が信じられるのはお前だけだ」

本宮「それで？ 何をするんです？ここで」

黒川「今何時だ」

本宮「10時10分です」

黒川「茜がもうすぐここを通る」

本宮「(呆れて) 先輩……」

黒川「あの日茜は、北見発午後9時半の最終列車に乗った」

本宮「先輩、目を覚ましてくださいよ。自分が何を言ってるか分かってるんすか？」

黒川「茜は、置戸で列車を降りてすぐにトラックに巻き込まれた。だから茜の意識は、

今でもこの廃線の上を元気に走り続けているんだよ」

本宮「もう、マジやってられないす」

黒川「聞いてくれ。あの日……」

本宮「あの日？」

黒川「茜が事故で死んだ日、俺たちは卒業し
たらすぐに結婚しようと話し合ったんだ」

本宮「そうだったんですか」

黒川「そのとき茜は、次の日曜日に、俺と一
緒に陸別に行きたいって言ったんだ」

本宮「陸別？」

黒川「陸別に誰かいるのかって聞いたよ」

本宮「……」

梟が寂しげに鳴く。

黒川「茜が高校3年の時、陸別の空にオーロ
ラが出たそうだ」

本宮「あ、それ覚えてます。ニュースでやつ
てましたから」

黒川「茜は、そのオーロラを、病気で死んだ
父親と一緒に見に行ったそうだ。そのとき、
茜が父親と約束したことがあって、その約
束を果たしたいからって言うんだ」

本宮「約束って？」

黒川「それが知りたいんだ」

本宮「先輩」

黒川「(遮って)列車が、置戸駅に到着した
のが、午後10時17分なんだ。だから、
もう少ししたら茜を乗せた列車がここを

通過する」

本宮「(諦めて)いいです。先輩がそれで気
が済むならつきあいます。けど、これでお
終いに」

黒川「(遮るように)自分の心を開くと、向
こうも開くんだよ。目で見える世界は本当
の世界じゃないんだ」

藪の中で鳥が騒ぐ。

遠くでレールが「カタン」と。

黒川「来た！」

本宮「先輩」

黒川「しっ、外に出よう」

川のせせらぎ。

梟の鳴き声。

黒川「目をつぶれ。ほら、聞こえるだろう」

本宮「何が？」

黒川「列車が近づいて来てる」

本宮「何言ってるんですか」

黒川「おおー、おおー、来たあー！ 待つて
くれー」

得体の知れない何かが駆け抜ける。

黒川が追いかける。

本宮「(も、駆け出す)先輩！ 何処へいく
んですかあー」

黒川「茜ー！ 待つてくれー！ あのととき、

俺に言おうとしたことは何だったんだー」

本宮「先輩！ そっちは鉄橋ですって！ 危
ないから止まってくださいーい」

黒川、歩き始める。

黒川「分かったー！ 分かったぞ茜ー。あり
がとう、あ・か・ねー。あ・か・ねー」

本宮のM「黒川先輩は、廃線の伸びる無音の
闇に向かって叫び続けた。先輩の取り乱し
たぶざまな姿を、そのとき僕は何故か美し
いと思った」

黒川「本宮、聞いたかあ？ 茜の声をー！
(と夜空に叫ぶ)」

本宮「はい、せんばーい！ (と叫び返す)」

黒川「ありがとう、ありがとう (とむせび泣
く)」

本宮のM「夜空を仰ぐ先輩のシルエットを、
一面の星空がすっぽりと包み込んでいた。
黒川先輩にとって、ふるさと銀河線の最終
便は今夜だったのかも知れない」

大学構内。

明るいキャンパスの様子。テニスボー
ルを打ち合う音など。
携帯のプッシュを押す。

本宮「母さん」

朝子「珍しいね、泰から電話くれるなんて」

本宮「ねえ」

朝子「何」

本宮「父さんを家に入れてやりなよ」

朝子「(ぼつと喜んで) え? いいの?」

本宮「……父さんの体の具合は?」

朝子「さあ、大分、良くなったみたい」

本宮「ずっと、アパートまで看病しに通って

たんだってね」

朝子「何よ、知ってたの?」

本宮「うん」

朝子「そう。父さんが、泰に謝りたいって。

今度の休み、斜里に戻ってこられないの」

本宮「今はまだ無理。けど、そのうち帰るよ」

朝子「そう……。待ってるから」

本宮「うん、じゃあ」

電話切れる。

歩き始めるとすぐにメール着信音。

本宮のM「珍しく黒川先輩からメールが届いた」

本宮「(たどたどしく読む) 本宮君、土曜の夜、尚美と二人で星見荘にくること。もし来なければ君たちの身の安全は保障できない。(途中で笑いながら) 何だよこれ」

走るバスの中。

曲がりくねった山道を上る、喘ぐようなバスのエンジン音。

本宮のM「学校に戻った黒川先輩は、週末になると陸別の民宿でバイトをしている。聞いた話では、佐久間先生の親類が経営しているらしい。先輩はあの夜、何を聞いたんだろうか」

バスがカーブを曲がる。

本宮のM「バスがカーブを曲がる度に、すぐ横で居眠りしている尚美さんの肩が僕の肩に触れ、尚美さんの黒髪の甘い香りが鼻先に漂った」

アナウンス「(女性の声) 次は陸別、陸別、終点です」

本宮のM「薄暗くなった山道を、バスのライトが照らし上げ、驚いた鳥がバサバサと飛び立つのが見えた」

完